

臨床倫理メディエーション

国立大学法人山形大学医学部
総合医学教育センター

准教授 中西 淑美

64 マスク着用にみる道徳性の起源

はじめに

2023年5月8日より新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置づけが2類から5類へと移行された以降は、「基本的対処方針及び業種別ガイドライン」は廃止となり、個人および事業者は自主的な感染対策に取り組むこととなった。基本的な感染対策として、引き続き、「3つの密の回避」、「人と人との距離の確保」、「手洗い等の手指衛生」、「換気」等の励行について呼びかけている^①。「マスクの着用」の考え方については、個人の主体的な選択を尊重し、着用は個人の判断に委ねることを基本とし、令和5年2月10日新型インフルエンザ等対策推進会議

基本的対処方針分科会で示された「マスク着用の有効性に関する科学的知見」等を踏まえ、感染防止対策としてマスク（不織布マスクを推奨）の着用が効果的である場面などを示している^②。本稿では、マスク着用における道徳性の起源について考えてみたい。

1. 5類移行後もマスクは着用し続けるか

まず、全国の会社員を対象に、リスク対策.comという会社が、2023年5月8日以降におけるマスクの着用意向等に関するアンケート調査を実施しており、その結果について引用する^③。

調査期間は、2023年4月22日から26日の5日間のインターネット調査で、調査対象は、20歳以上65歳以下の会社員838人で、回答者の男女比は男性49・3%、女性50・7%で、年齢層は20代、30代、40代、50代、60代の各年代とも20%前後だった。居住地では東京都が18・9%で、大阪府（8・9%）、神奈川県（8・4%）、埼玉県（8・1%）であり、この調査は、兵庫県立大学教授の木村玲欧氏と関東学院大学准教授の大友章司氏の協力を得て実施している。

末尾には、二人の見解も述べられている。5月8日以降も日常的にマスクを着用することを「受け入れる」と回答した人は、54・3%で、生活の場面別では、5月8日以降も「公共交通機関」では77・8%がマスク着用し、「周囲に人がいる屋外」でも60・7%がマスクを「着用したい」と回答したという。

マスクを着用する理由や目的については、複数選択方式で聞いており、①「感染防止の徹底」が38・6%で、②「花粉・黄砂対策」（34・2%）、③「マスク着用が習慣になっている」（30・0%）、④「周囲の多数がマスクを着用している」は23・5%であった。また、マスク着用を「全く受け入れられない」

と回答した者はわずか4・5%、「あまり受け入れられない」は10・7%であった。マスクを着用しない理由については、「息苦しい」が38・4%で最も多く、「暑い」(27・6%)が2番目に多く、3番目は「特に理由はない」(18・7%)、「熱中症が心配」(18・7%)が同数で、4番目は「感染症が落ち着いた」(17・8%)であった。木村氏と大友氏は、同サイト上で、それぞれ、以下のコメントを述べている。

「マスクは「新型コロナウイルス感染防止」というだけではなく、人によって違和感を覚えながらも「習慣」「エチケット」「周囲からの同調圧力」として定着している現状がうかがえる。しかし、今後、気温や湿度が高くなるにつれ、マスクによる熱中症のリスクも考えられることから、「外したいなら・必要ないと思うならマスクを外す」ことを積極的に呼びかけていくことも重要である。世界各国が「新型コロナウイルス流行終息宣言」を出す一方で、日本では「新型コロナウイルスの脅威は今後も続く」、「新型コロナウイルス感染症はほぼ収束するとは思わない」が5割程度にのぼるなど、未だに新型コロナウイルスに対する警戒感が強い^④(以上、木村玲欧氏のコメント引用)。

「コロナ禍が長期化し、マスク着用が習慣化し

ている。人は変化することに抵抗を感じやすく、とりあえず着用したままдейようとする現状維持バイアスの心理が作用していると考えられる。5類移行後にコロナ禍のリスクをどれくらい受容し、それに見合った行動になるよう変化が求められる^⑤(以上、大友章司氏のコメント引用)。

つまり、この調査では、感染防止のリスク認知と共に、周囲との関係性や習慣化、同調圧力といった現状維持バイアスの心理が作用して、マスク着用は継続すると考えられている。

さて、厚生労働省は、「着用が効果的な場面」として、高齢者など重症化リスクの高い方への感染を防ぐため、①医療機関を受診する時、②高齢者などの重症化リスクの高い方との接触、③医療機関、通勤ラッシュ、④混雑する場所、⑤症状がある場合、⑥子どもさん達への配慮、⑦障害者、⑧事業者の感染対策上の指針などを挙げ、マスク着用の推奨をしている。

確かに、世界6大陸の着用状況と流行制御の関連をベイズ階層モデルで分析した研究においても、公共の場におけるマスクの着用は、平均的なマスク着用率を達成している場合、着用なしと比較して実効再生産数をおおむね19%下げること貢献してきたとされる^⑥。

本調査からは、次のことがいえよう。

つまり、感染防止という正当化事由により、マスクの着用については、3年以上に及ぶパンデミックという非常事態の期間に、(花粉症対策やその他の身体的要因以外の)マスク着用についての認識が変化した。すなわち、従前のマスクで覆うことや隠すことといったネガティブな印象より、ポジティブな印象を強化してきたのである。

2. マスク生活における意識行動調査では

次に、先ほどの調査とは異なり、本邦での第7波の昨夏の時期に行われたマスク生活の意識調査を紹介してみよう。これは、マスク生活の長期化に伴い、消費者はマスク着用をどのように捉えているか、今後のマスク使用意向や政府が打ち出したマスク着用方針についての調査で、日本インフォメーション株式会社によるものである。その調査概要は以下である^⑦。

調査対象は、全国の16〜69歳の男女で、983人である。10代から60代まで性別はそれぞれ73〜90人ずつほぼ同数で割り当てられている。

調査時期は、2022年8月で、場所や状況によつて調査されており、2022年2月に行った調査との比較もしている。

詳細は、引用文献にあげたホームページを参照していただきたいが、結果としては以下を挙げている。①コロナ収束後のマスクの着用意向は37・4%、2月より17・1ポイント減少している。女性に比べ、男性は着用したくない意向が高い。②屋外でのマスク着用理由の1位は、感染のリスクに不安を感じることで、着用の習慣化が身についている。③マスクを着用したくない理由の上位は、息苦しさや暑いことである。④政府のガイドラインのマスク着用要件については、半数弱が同意している。

この調査でも、新型コロナウイルスの流行から2年以上が経過し、マスク生活が長期化したことによる、マスク着用についてポジティブな側面を指摘している。女性ではおしゃれとして、また、若者の中には、マスクで顔を隠すことの効用として、「人前にさらすのは恥ずかしいから、コロナ禍が終わってもマスク着用を続けたい」という声もあるとしている⁵⁾。

前述したように、顔を覆うことは夏の暑い時期であるにもかかわらず、肯定評価を獲得し、

非言語表現の笑顔などの印象操作とは別途の「価値としての正当化」を供与したといえる。

この調査では、年代別に、感染防止に対するマスク着用目的が、異なることが興味深い。前述したマスク着用に関して、屋外でのマスク着用理由が、全体で「屋外でも感染のリスクに不安を感じる」(43・9%)が最も多いが、女性では「メイクをしていなくても良い」が20代以上で2〜3割、男性では「髭を剃っていないでも良い」が全世代で1〜2割示されている。また、次のようにも述べている。10代では、男女ともに「小顔に見える」「可愛い、綺麗、かつこよく見える」が1割以上と、他の年代より見た目にポジティブなイメージがあるようです。女性では、10代と30代の「他の人の目が気になる」が4割弱に達しているほか、10〜20代では「肌荒れを隠せる」、40〜60代の「ほうれい線を隠せる」「頬のたるみを隠せる」などが他の世代より高くなっており、見た目をネガティブにとらえてマスクを着用する傾向が見られます⁵⁾。

マスク着用は、社会生活の中で、感染防止の意味を超えて、個人の嗜好や自身の判断について、人々に、多様な価値や判断基準を取り込むうとしているのである。

3. マスク着用における5類相当のインフルエンザ予防のエビデンスでの検討

さて、大義名分である感染防止の観点から、5類相当になった感染症におけるマスク着用のエビデンスについては、厚生労働省の見解の通りであるが、10年前のある論文を紹介する⁶⁾。

瀧澤は、2010年、マスク着用がインフルエンザや他の感染症予防に有効であることを検証した推奨度A、エビデンスレベル1bのランダム比較試験のエビデンスはなく、システムティックレビューの対象となる49論文でも、マスク着用の呼吸器感染症予防効果のものはないとする⁶⁾。また、症例対象研究やメタアナリシス(複数の試験結果を統合して全体として何が言えるか統計的に評価する方法)では、各研究のオッズ比の違いは大きく、その違いも有意であることを示しているとする。さらに、2009年の米国疾病予防管理センター(CDC)のガイドラインで、マスク着用は、感染者への接触時に、常時徹底着用すれば有効である可能性があるとしている。

結論として、瀧澤は、「マスク着用には、インフルエンザやほかの感染症予防に有効であるとい

う推奨度Aのエビデンスはなく、推奨度B、エビデンスレベル2bあるいは3aのエビデンスがある。〔中略〕手洗いの感染症予防効果が統計的に有意で、マスク着用が有意でなかったのは、マスク着用群に割り付けられた被験者のマスクの常時徹底使用が難しかったためと考えられる〕⁶⁾と述べる。

10年以上前から、マスク着用については、人の生態的な行動として、常時の着用は難しく、感染予防効果としては、現在と同じく手洗い励行の感染効果が高い。

つまり、マスク着用は、常時着用において有効となる可能性があるという結果なのである。

4. マスク着用にみる道徳性について

政府の方針はあっても、合理的な理由と個人の判断を重んずる諸外国に比べ、我が国では、紹介した調査でも明らかのように、マスク着用を遵守する人は多いと考えられる。

欧米の道徳や倫理観の源は、歴史の中で奴隷制度や植民地支配、略奪的資本主義や戦争、気候変動などのなかで利己や利他、幸福や精神の思考として、哲学として発展してきた。

日本人は集団主義的民族で、似た意見の人と結びつこうとしたり、ある特定の考えで集団がまとまると、他の集団の間に壁を築いたりする傾向が強いと言われる⁷⁾。海外では、早くにマスクの着用義務が解除された。一方、インターネットの情報が入手できるにもかかわらず、集団志向が強い日本では、同調圧力が強く働き、周囲の状況を見てから自身の主張や意見をする⁸⁾と見られている。しかし、これまで述べてきたように、基本的には感染生活への慣れや感染予防という目的があるにしても、マスク着用を遵守する人が多いのは、単なる行動科学の選好の問題として理解できるのだろうか。そこに、異文化理解や多文化共生を推進するような道徳的起源の発現を感じるのである。

前述の2つの報告に見られたマスク着用の目的や理由は、感情や情動、配慮といった諸個人の心の過程が「道徳源」である。集団主義には、自分や家族、仲間、社会の人たちの幸せを気遣う価値評価の心的諸過程の中で、矛盾の解決や防衛、資源分配、平和の維持などの多様な社会生活の多くの側面に自身が適合するための諸規範が生み出される。このような諸過程は社会的な問題解決の意思決定の背景に垣間見ることがで

きるのではないか。気遣う必要のある事柄を認識し分類することによって、社会的世界の過程を経験する。社会的世界では、集団の個々のメンバーの社会的振る舞いや、「道徳的」とか、「法的」とか呼ばれるものを含む、さまざまな社会的・文化的実践の表現の現れとして、諸個人が正当的行為として他者に対してそれらを示そうとする。

要約すると、人間は、他の社会的哺乳動物と同じく、集団のメンバーと一緒に過ごし、共同で実践を行おうという強い動機をもっている。我々の道徳的行動は、他の動物の社会的な行動よりも複雑だが、基本的には周囲の生態環境の中で、何とかうまくやっつけようとするさまざまな試みであることに違いはない。

懐疑論者で有名な哲学者のデヴィット・ヒューム (David Hume, 1711-1776) は、道徳的行動とは、道徳的情緒と呼ばれる継続的に続く社会的動機のうちにあるとし、それは、我々の生物的本性に属するものであるとした⁹⁾。ヒュームは、このことを "Moral distinctions not derived from reason." 「道徳的区別は理性によらない」と表現している。

つまり、哲学者であるヒュームは、アリストテレスやダーウィンと同じく自然主義者として、

道徳性には、動機、思考、感情、記憶、計画などの心的諸過程間の動的相互作用と道徳的決定の間の複雑な関係がある、としたのである。それは、社会的動機と社会的実践の間の関係は、論理的演繹（導出）ではなく、制約充足の過程であるという答えを見つけ出していくということである。

実践的、社会的問題の大部分は、制約充足問題であり、その解決を見出す場合、我々は、規則より、直面する事態の価値の意味を根源的に推論する。個々の置かれた状況の中で、また、自分の社会的世界の中で、うまく個人と社会の両方の中で立ち回るように、暗黙的に、経験的・体験的慣習として学ぶのである。それが、社会生活での価値をまた見出し、明文化され、さらに、熟慮され、修正され、利自と利他に「正しく感じられる」という、道徳性を生み出し、学習し、新たな道徳的起源になるのである。

おわりに

今回、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類へと移行された以降における、「マスクの着用」の個人の主体的な選択を題

材に、それらの研究調査結果を基に、その根底にある、我々の脳がつくる倫理、すなわち、科学と哲学からの道徳的起源について述べてみた。社会的もしくは物理的な世界において、社会的動機であつても、ある行為をするように仕向ける実践的な心の働きは、道徳的情緒となる。道徳とは、日常生活の営みとの関係で生起する。問題は、感染防止や選好といったこと以上に、そこに、文化的な信念や実践が道徳性（道徳の起源）を生み出し、人間の社会性に影響を及ぼすということなのである。

参考文献

- (1) 基本的対処方針に基づく対応—内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室 (coronago.jp) <https://coronago.jp/emergency/> アクセス2023年5月6日
- (2) 「マスク着用の有効性に関する科学的知見」(第116回(令和5年2月8日)新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリーボード提出資料) <https://www.mhlw.go.jp/content/1090000/0/001055263.pdf> アクセス2023年5月6日
- (3) 5類移行後もマスクは着用し続ける!?人々の行動は変わらさず—独自調査—リスク対策.com—新新聞社 (risktaisaku.com) <https://www.risktaisaku.com/articles-/78933> アクセス2023年5月6日
- (4) Leech G, Rogers-Smith C, Monrad JT, Sandbrink JB, Snodin B, Zinkov R, Rader B, Brownstein JS, Gal Y, Bhatt S, Sharma M, Mindermann S, Brauner JM, Atchison L. Mask wearing in community settings reduces SARS-CoV-2 transmission. Proc Natl Acad Sci USA. 2022;119 (23) : e2119266119.
- (5) マスク生活はどこまで続く?—マスク着用の意識・行動調査—アンケート調査・マーケティングリサーチなら日本インフォメーション (n-info.co.jp) <https://www.n-info.co.jp/> アクセス2023年5月6日
- (6) 瀧澤毅:「マスク着用にインフルエンザ予防のエビデンスはあるか?—EBMによる検討—」千葉科学大学紀要、3149-160.2010
- (7) ヨハン・ガルトウング、御立英史訳:「日本人のための平和論」、ダイヤモンド社、2017年、東京、総頁267
- (8) デイヴィット・ヒューム、伊勢俊彦訳、:「人間本性論(第3巻)道徳について」、法政大学出版局、2011、第三部第三節、163頁、一部変更